

宮平真弥著

『琉球独立への本標——この111冊に見る日本の非道』

(二葉社、二〇一六年)

植村 秀樹

一

「本書は書評集である」と著者(宮平)は「はしがき」で述べている。となれば本稿は書評集の書評ということになるが、本書は厳密に言えば書評集というわけではない。にもかかわらず、「書評の形をとっていない論考もすべて本の紹介」という「筆者の意図」故に著者自ら「書評集」と呼ぶものとなっている。ところが、著者が「多くの人に読んでほしいと思った文献の紹介」とはいうものの、内容からすると単なる紹介ではなく、それぞれか、書評という形をとっているものの中にも、自説の展開が主たる目的と思しきものもあり、結局のところ、書評集の体裁をとった評論集と呼ぶべきものであろう。となると、本稿は評論集の批評ということ

になる。

書名がそのまま著者の問題意識と本書の目的を示している。「琉球独立」論の背景と独立への道程を探ることであり、そのために「日本の非道」すなわち「日本国が琉球・沖縄にしでかしたこと、現在しでかしていることを『本土』の人たちに伝えたい」ということである。そして、ここに紹介されている文献を読んで「琉球独立を考える読者が出てくれれば望外の幸せ」だという。著者は沖縄ないし沖縄人に對比するかたちで本書の読者として「本土」の住人——特に「本土」在住の有権者——を想定しているので、本稿では読者対象となる人を「本土人」と呼ぶことにする。これに対するは、著者の用語法にならえば「琉球人」——日本と関係の深い「沖縄」でなく、中国由来の「琉球」を好むのが、独立派の人びとの傾向のようだ——ということになる。従って本書では、この「本土人」と「琉球人」が鋭く対立するものとして描かれる。

まず紹介しておくべきは「琉球民族独立総合研究学会」——長い名称なので、以下「民族独立学会」とする——という学会が二〇一三年に沖縄で創設されたことである。その設立趣意書によれば、この学会は「琉球の島々に民族的ルーツを持つ琉球民族の琉球民族による琉球民族のための学会」であり、それゆえ会員資格が限定される——要するに「血」——ことになる。奥付によれば著者は那覇市出身で沖縄県立首里高校に学んでいるので、会員になる資格があるものと思われるが、「著者は独立学会の会員ではない」とのことである。理由は記されていない。

「著者の願い」は「どこまでも他人事としてしか沖縄を見ない『本土』住民や、研究のネタとしてしか沖縄をみない『本土』の研究者が当事者としての認識を持つこと」である。また、著者は「ふだん沖縄人を日本人扱いたくないでいて、沖縄独立論に「反発する日本人がいかに多いか」と、本土人の独立論批判に不満を述べている。しかし、評者の知る限りでは、本土でそういった声を聞いたことはない。その理由は二つ考えられる。

まず、沖縄研究を専門とする者や沖縄の問題に強い関心を抱いている人以外には、民族独立学会の存在はほとんど知られていないという基本的な事実であり、もう一つは、沖縄に関心を持つ本土人の多くは——沖縄研究を専門とする者を含めて——理由はともあれ、この学会についてあまり言及しようとしないうことである。民族独立学会に対しては、評者の沖縄滞在中（二〇一三年九月～二〇一四年三月）に、むしろ沖縄の中で少なからぬ批判——警戒心というほうが適切かもしれない——を耳にした。評者自身は沖縄研究を専門としているわけではないので、沖縄研究者との接触はそれほど多いわけではないのだが、それでもあくまで評者の接する限りというならば、民族独立学会に対する批判——ないし警戒——は主に琉球人の中から出ているものと承知している。要するに、この学会の在り方やその方向性が当の琉球人の間でも論議を呼んでいるということではあるまいか（ここまでの引用はすべて本書の「はしがき」および「あとがき」から。以下の引用は、特に断らない限り、すべて本文からである）。

二

本書は三部に分かれている。第Ⅰ部は「歴史・事実・現況」として、八本の評論——本の紹介——から成っている。沖縄の歴史と現在抱える問題を多くの書物を紹介しつつ掘り下げようとして論じており、読み応えがある。琉球王国、薩摩の侵略、琉球処分、沖縄戦、そして戦後の占領と基地問題といった沖縄の苦難の歴史——これが概ね沖縄史の「定番メニュー」として定着している——をここに紹介されている書物から知ることができる。さらに、沖縄が日本の「固有の領土」か否かを問うものから、ミソジニー（女性嫌悪）や警察機動隊員の「土人」発言まで、取り上げられているテーマは多岐にわたっているが、いずれも基調——通奏低音に

して主旋律——は同じである。「本土人による琉球差別」が本書を貫く主題である。

いくつか例を挙げておこう。「本土」住民の誤解は沖繩への偏見と無関心によるもの、「根底には沖繩人蔑視がある」、「沖繩は日本国（及び米国）の犠牲になって当然であり、基地くらい我慢せよとの意識が前提にある」、「多数の日本人が沖繩人を自分たちとは異なる集団と認識し、差別的言動、差別的扱いをしている」、「沖繩を利用して」自己の安全をはかるといふ、「日本人の発想」、「日本国全体の沖繩差別」、「土人」と見下されている」といった表現がそこかしこに頻繁に顔を出す。

沖繩が歴史的に差別的扱いを受けてきたとの認識は、今や本土人の間でもかなり広く定着していると思われる（二〇一七年七月の内閣改造で沖繩及び北方担当大臣に就任した江崎鉄磨もそのような認識を示した）。ところが本書を貫く主張は、過去においてだけでなく、本土人の琉球（人）差別は今も抜きがたく存在し、それが米軍基地問題の根源であり元凶であるというものである。「多数の日本人が沖繩人を自分たちとは異なる集団と認識し、差別的言動、差別的扱いをしていることこそが問題の本質である」といった表現に端的にそれが現れている。

しかし、これは正確な——特に基地問題を考える上での的確な——認識であろうか。もちろん、基本的な歴史的事実さえも知らない本土人のための読書案内が本書の目的なのだとすれば、差別の歴史を紹介することの意義は大いにある。本書で紹介されている書物を読むことでそうした歴史を学ぶことができる。また、新型輸送機オスプレイの普天間配備や辺野古埋め立てによる新基地建设など、最近の事情についても参考となる書物を紹介しており、そういった事情に通じていない読者には有用な読書案内の役割を果たすであろう。その一方、そういった事情についての初歩的な理解の段階を超えている読者にとっては、どうであろうか。本土人による差別（意識）が現在の沖繩が抱える問題の根源であろうか。歴史的にみて差別の事実があるからといって、現

在の基地問題に至るまでそうした差別の歴史で説明できるかどうかは、慎重な検討を要する。

著者の挙げる差別の事例の中心は明治期から一九七二年の沖縄返還——沖縄からすれば本土への復帰——前々までのものである。その時代には差別（意識）が強かったとしても、安全保障政策を中心とする戦後日本の政治外交史を研究してきた者のひとりとして、現在の基地問題にそれを直結させて論ずることに疑問を感じざるを得ない。

第二部「書評という訴状」には五本の書評が収められているが、本の紹介とその批評にとどまらず、ここでもやはり持論の展開に力を入れている。第三部は「カタルーニヤと琉球」である。スペイン国内で独自の文化を維持し、自立・独立志向の強いカタルーニヤの歴史と運動に琉球独立への示唆を得ようとするものである。

沖縄の独立において最も重要な問題のひとつが経済的自立であろうが、この点では屋嘉宗彦『沖縄自立の経済学』を取り上げて「沖縄経済の自立という絶望的に困難なテーマを扱っていながら」「読むと不思議と明るい気持ちになる」と著者は言う。評者はこの本を読んでいるが、評者が沖縄経済に関していくらか調べた経験では「明るい気持ち」になれなかったもので、これはもしかしたら貴重なものかもしれない。

二二

本土人が差別意識を拭い去れば基地は沖縄から撤去されるというものではなく、同じく、沖縄の独立に理解を示すはずだというの甘い見通しである。本書を読んだ印象に過ぎないが、著者はこれまで政治や社会運動に関わった経験は少ないのではなからうか。このこと自体は責められるべきことではないが、それゆえにか、結論を急ぎ過ぎるきらいがある。また、本書のもととなった原稿の執筆・発表年（いずれも二〇一五ない

し二〇一六年）および論述の内容からのこれも推察に過ぎないが、沖縄の基地問題に取り組むようになったのはかなり最近のことと思われる。

一九九五年に茨城大学教職員組合が「沖縄県のみへの基地の集中を放置するのではなく、日本全都道府県に均等に米軍基地がおかれることもありうべきと考えます」とのメッセージを發したが、著者は、この「選択肢」を「多くの『本土』在住者は無視した」と難詰する。しかし、そもそも「日本全都道府県に均等に」という表現からもわかるように——茨城県は嘉手納の滑走路を二百メートル分引き受けたといったことが可能か——現実的な提案というより、あくまで当事者意識を持つための思考実験のようなものであったと見るべきであろう。そして何よりも、この提案は本土人の十万人にひとり——もちろん推測であるが、当時から沖縄の基地問題に関心を寄せていた評者の耳目にも届いていなかったことからせいぜいのところ——程度にしか知られることはなかったであろう。これをもって、本土人は提案を「無視した」というのはどう鼻屑目に見ても軽率のそしりを免れない。

マスメディアなどで沖縄問題を論じる際に評者は「これは日本全体の問題であり、当事者として考えるべきだ」と述べることが多いが、それが甚だ容易ならざること承知している。当事者として考えなければならぬ問題は誰もがいくつも抱えている。そういう中で沖縄の優先度を上げさせるには、どうしたらいいのか。差別の歴史を突きつけることが果たしてどこまで有効だろうか。

近年では普天間・辺野古問題がこじれたこともあって「差別」が頻繁に語られるが、そもそもは新崎盛暉が米日沖の三者の関係を「構造的差別」と表現したことが発端であった。それが次第に「差別」のひとり歩きが始まり、それとともに「構造」に目が行かなくなっている。初めて「差別」を新聞紙上で目にした数年前、これはまずいことになりそうだと懸念したが、それが現実のものとなった。

たとえば沖縄の米軍基地面積の七割強を占めるのは海兵隊であるが、これも著者の認識とは異なり、本土人が沖縄に押しつけたというのは正確な理解とは言い難い。海兵隊の沖縄移駐の経緯は複雑で今なお明らかになつたとはいえないが、近年少しずつ解明が進んできている。アメリカの世界戦略と軍部の基地展開戦略の調整の中で浮上したものであるが、基地問題に関心があるのなら、そうした政治外交史の基礎的な研究に目を通すことも視野を広げる上で必要であろう。

琉球民族独立の前に立ちほだかる最大の問題は、コソボや東チモールの例を見てもわかるように、国際社会——正確には他の諸国——がそれを認めるかどうかである。琉球独立を宣言したらどうなるか。米軍基地の存続を認めなければ、アメリカは独立を認めないであろう。基地存続となれば、中国が認めるとは考えにくい。つまり、いずれいれにせよ常任理事国の拒否権によって安全保障理事会が国連加盟を承認する見込みはない。国連に加盟できないのであれば、独立宣言も意味がないのではないか。琉球民族独立の最大の課題はやはり米軍基地なのである。

では、沖縄の米軍基地はどのようにしてできたのか。本土人の琉球（人）差別によってではない。戦後、米軍が沖縄を基地として占領し、サンフランシスコ講和条約が——日本国の主権回復の代償でもある——それを追認し、沖縄返還は基地の存続とその自由使用を継続することが条件となった。沖縄の米軍基地はアメリカの世界戦略の一環であり、著者が考える本土人の琉球（人）差別よりもはるかに深く大きな問題である。

著者は沖縄が「国防に最も貢献してきた」と言うが、これも正しくない。沖縄の基地は、三沢、横田、横須賀、岩国、佐世保といった本土の米軍基地とともにアメリカの海外基地展開の一環であり、日本防衛は米軍基地防衛の一環としてそこに組み込まれている。面積でいえば在日米軍基地の七割以上が沖縄に集中しているが、これは誰が——しばしばアメリカ人が——見ても過大な負担となっている。しかし、面積の比率がそのまま防

衛への貢献度合いではない。本土では基地の面積は増えなくとも——むしろ本土全体としては減ってきた——基地機能を見れば一貫して強化されてきている。

ところで、先の引用に「『土人』と見下されている」という一説があるが、「土人」発言を聞いた時に、評者はあきれると同時に「懐かしい」——いささか不謹慎と思われるであろうが、正直に言う——という感覚を覚えたものである。評者（一九五八年生まれ）の子ども時代には誰もが当たり前のように——沖繩に対してではない。この言葉で沖繩を意識したことはない——使っていた言葉である。やがて「土人」は本来の意味から離れて差別的とされ、使ってはいけない言葉になってしまった。今日ではほとんど死語であるが、大阪から派遣された機動隊員と知って感嘆した。若い人であるということ、大阪人——大阪府警から派遣されたというが、生まれも育ちも大阪に違いないと評者は思っている——であるということに。評者が大阪に対して偏見を抱いていることを隠すつもりはない。今時こんな言葉を使うのは、日本中を探しても大阪人以外には見つかるまい。評者に言わせれば、この「土人」発言は大阪人のなせるわざに他ならないのだが、著者の手にかかる、これも本土人全体がこういう認識だからひとりの本土人の口から出たということになる。著者はひとりの大阪人の言葉を本土人全体のものとして捉えているのである。評者からすれば、これも大いなる偏見である。愛知県出身で千葉県在住の評者は、大阪人と一緒にされる扱いに——これが差別意識でなくて何だというのだ——大いに腹を立てている。

本土の各地にも大きな地域の違いがあり、それが偏見に——しばしば差別的意識にさえ——つながっている例は無数にある。日本だけではない。離れた地域に対する無理解や誤解は、世界中に見られる——これを是認するわけではないが、ほとんど普遍的といえるほどである——現象であり、簡単になくなるものではない。それよりも何よりも、人は自分の生活に直接関係のないものには関心を持たないものである。首都圏にも少な

からぬ米軍基地があり、基地の機能から見れば、最も重要な基地は首都圏に多いともいえる。そして問題を抱えている。厚木（神奈川県）や横田（東京）では、長年の騒音をめぐって訴訟が起きているが、評者の住む千葉県民はほとんどそのことを知らない（これは千葉人の東京人や神奈川県人への差別か）。事情は茨城県民も——たとえ沖縄出身者であっても——変わらないであろう。普天間・辺野古の問題が沖縄でなく、たとえば対馬か小笠原であったとしても、展開はおそらくあまり違いのないものであったと思われる。

沖縄の人は「本土」「本土人」とひと括りにすることで、本土の多様性を無視する傾向がありはしないだろうか（これも評者の沖縄滞在中に感じたことであり、本土出身の沖縄在住者もそう感じることは少なくともないようだ）。大阪に対する評者のまざれもない偏見を披歴したついでに言えば、沖縄の離島や山原の出身者から首里（那覇）に対する不信や不満をしばしば聞いた。ここにも根強い差別の歴史があるからだ。本土と同様、沖縄も簡単にひと括りにしてはいけないものだと痛感した次第である。それ以来、首里（那覇）出身者が沖縄を代表するようなもの言いをする場合には、特に気をつけるようにしている。

おわりに

いささか性急な記述に傾斜しがちなきらいはあるが、民族独立派の議論——あるいは心情——を知る上で有用かつ便利な一書である。しかし、日本が「しでかした」「非道」を本書で知ったとしても、それで琉球民族独立に理解を示すようになる本土人はそれほど——おそらくほとんど——増えないのではなからうか。「血や遺伝子は関係ない」と著者は言うが、民族独立学会の入会資格は明らかに「血」である。先に触れた批判ないし警戒感、ここに時代錯誤の排除の姿勢を感じ取るからであろう。

本書のカバーと表紙を飾る大嶺政敏の二点の絵画について、大嶺隆による解説が付してある。表紙の「ケラマ島集団自決供養」は「失敗作」とされ、その理由のひとつは次のようなことだという。自戒を込めて引用しておきたい。「戦争の惨禍にのめり込みすぎて、見る側に対するバランス意識が欠けた。戦争というテーマの重さに、絵筆がついていけない」。